

両手で口もとを隠し、哀願するその姿。目の前にあるのは世界一美しい音色を奏でることができ、世界一淫靡いんぴな楽器。勇太はスティックの先で彼女の胸を突つく。

「ひゃあんっ、はっ、だめえ……先輩、ちゅ、中心をちゃんと叩かなくちゃ……ね」

「そ、そっか。わかったよ……中心、だよね」

勇太は必要以上に強くスティックを握りしめて、充血した乳首に先端を当てる。

「あはっ！ せ、ぱっ……っ、強い……んああ、あんっ！ 強すぎるよう……す、すごくか、じちやうう」

丸みのあるスティックの先端。そこは冷たく、たび重なる練習で傷つき、表面はでこぼこしていた。

力の入った手を緩め、ゆっくり優しく天音という楽器を奏でていく。弱いストロークの時は弱々しく愛らしい声、強いストロークの時は激しく身体を揺さぶって甲高いかんだか声をあげる。

忠実な人間性感楽器。勇太は普段の練習以上に集中し、的確に乳首だけを叩きつづけた。

「ゆ、うた先輩、上手よ……とっても、優しいタッチ、あんっ！」

顔を揺らすたびにトレードマークのポニーテールが跳ねあがる。そしてかすかに感

じた愛液の香りに抗うかのように、シャンプーの香りをあたりに漂わせる。

「天音ちゃんもよく手入れされてるね。綺麗な音色だよ」

勇太は急に手をとめる。ゆっくりと下を向くと、気づかないうちに天音の手が少年の股間に走っていた。

廊下での急な密着。カフェでの触り合い。友人の前での恥辱行為。それぞれの興奮を溜めこみ、今にも爆発してしまいそうなほどそり立ったペニス。ズボンを猛々しく押しあげ、力強いテントを作りあげている。

「あは、先輩……私の姿を見て、興奮してくれているの？」

「ん、まあそういうことになるのか、なあ」

勇太はサツと目を逸らす。その姿を見て余裕ができたのか、天音はクスクスと笑いながら少年のズボンに手をかける。彼が反応を示す間もなく、彼女は素早くホック、チャックをはずす。

パンツを押しあげ、大きな山を作る肉棒。陰部の近くにそれがあつたせいか、見ただけだと思ううつとりとした息をもらす天音。

「嬉しい……先輩が私を感じてくれて、本当に嬉しい」

甘い歓喜の声をもらし、天音は自らスカートを捲りあげる。少年が今の今まで気に



かけていた秘密の空間。

黒いカーテンが幕を開ける。そこには薄い水色のパンツと、テープで固定された桃色のローター。自分の影でよく見えなかったが、ローターのまわりだけ色が濃くなっていたことはよくわかった。その周辺の太腿も光を反射し、蜜で濡れていることをアピールする。

「ね、こつちも……演奏してよお」

天音は顔を横に傾けたまま、自分の股座に手を当ててみせる。その誘いを受け、スティックは乳首から淫臭を漂わせる少女の秘所へと移動する。

「早、く……早く、私を、弾いてえ……あはあっ！」

木の棒の先端が湿った布地に触れる。その瞬間、天音は瞼まぶたを閉じて歓喜の声を部屋中に轟とどろかせる。

その感触はスティックを伝わり少年も感じるができる。給水した布地は柔らかく、スティックにかけた力を鮮やかに吸収する。微力ながら押しかえされる陰部の反応に、このまま貫いてみたいという欲求にも駆られてしまう。

「リズムカルだね……天音ちゃんの呼吸に合わせて、いっぱい突いてあげる」

勇太は少女の息、声、自分の心音に合わせてタイミングよく陰部を突く。濡れたパ

ンツは守るためのものにはならず、その内側に眠る黒い芝生とともに陰唇にこそばゆい刺激を送る。

突くたびにもれる声、いやらしい愛液の絡まる音。優しい突きは次第にペースをあが、膨れあがつた陰部を押しかえす。

「やああんっ！ はうっ、んんうう、い、いいよう……すごいよう！ せんば、先輩のスティックが、いっぱい、いっぱい私を突いてくるう」

透き通った声で実況する天音。気が狂ったように身体を揺らし、ベッドに軋んだ音をたてさせる。恥じらいは消え去り、全身にむず痒い感覚が走る。太腿を擦り、腰を浮かせてはスティックの快楽を貪<sup>むさほ</sup>ろうとする。

（やばい……天音ちゃん、可愛すぎる。僕も、我慢できない！）

勇太は生唾を呑みこみ、スティックを床に放り投げる。木の乾いた音が保健室に響くと、天音は一瞬冷静になって勇太のほうを向く。

「あ、あの……天音ちゃん。僕も、そ、そろそろ……その」

まどろっこしくはつきりしない言葉遣い。彼女は少しだけ口もとを曲げ、ベッドについた彼の手にそっと自分の手を重ねる。

「私も……先輩の、その、スティックで……弾いてほしくなっちゃい、ました。です

から、その……ね」

天音はそれだけ言うのと、黙って目を閉じる。少年も彼女がなにを言わんとしているのかを察し、彼女のパンツに手をかける。

濡れた下着は彼女の股に張りついており、少々力任せに引っ張る。太腿を擦り、肌を傷つけないようにゆっくりと。

「はあああ……先輩、そ、んなに見ないでください」

離れた下着と陰部は蜜の糸で結ばれ、距離が離れるにつれて白いシーツの海に爛れ<sup>た</sup>る。黒い純毛に愛液の雫<sup>しずく</sup>。その先に見えるほんのり赤い裂け目。

驚愕の景色を目の当たりにし、牡としての本能がその奥に興味を示させる。爪の先でいいねいに茂みをかき分け、蜜を溢れさせる性の泉をあらわにさせる。

ローターにより長時間刺激を受けつつづけていたせいだろう。男性器を受け入れる準備はすでに整っていた。

「お願い、見ないでえ……は、恥ずかしいですう」

「そんなことないって。とつても綺麗なピンク色だ」

割れ目から漏れる愛液が、陰毛の隙間を抜けて溢れだす。清潔感あふれる保健室の純白シーツ。それを汚していく卑猥<sup>ひわい</sup>な汁、男女の交わりそのもの。